

日本語学習に対する意識と日本語のイメージ

石 田 勢津子

問題および目的

近年、日本に対する諸外国の関心が高まるのにつれて、日本語の学習も盛んに行われるようになってきた。オーストラリアでも日本語教育に対する取組みが積極的になされ、大部分の大学や数多くの高校において日本語の習得のためのコースが設けられている。たとえば、ニューサウスウェールズ州のニューカッスル大学での日本語コースの受講生は、文学部の学生のみならず、経済学部、工学部、理学部、医学部など、ほとんどの学部にわたっている。さらには、東南アジアからの留学生や一般社会人も聴講生として多数受講している。かれらの受講目的はさまざまである(大野, 1982)。疋田(1985)の調査によると、オーストラリアの大学生の日本語学習の動機・目的は、自己の専攻分野の知識・情報を得るため、将来の職場で活用する機会に備えて、日本語に対する興味・関心のため、日本語に興味を覚えて、学校の単位取得のため、といった理由が多いとされている。

日本語の学習をどのような目的で行っているにせよ、一般に学習の初期の段階においては、動機づけはそれなりに高いと推察される。ただ諸外国の例からみると、こうした動機づけの高さに比べて、その学習効果はあまり高くないと言われている。その原因としては、たとえば日本語自体がもつ困難さによるもの、学習の構えや態度といった学習者側の要因、さらに、教授方法・教材など教授者側の要因も考えられる。

このような現状から、本研究では、学習者の要因をとりあげ、日本語学習の動機づけ、とくに、日本語に対する意識・態度に関する調査を実施し、日本語学習の習得

をより効果的に行うための方策を検討する。このような資料は、海外における日本語教育の改善のためばかりではなく、現在日本国内で問題となっている、帰国子女のための日本語教育への示唆をも与えてくれるであろう。

具体的には、オーストラリア国ニューカッスル大学における日本語の受講生を対象に、学期始めと学期終了時の2回にわたって、日本語学習に対する意識の程度と日本語に対してもっているイメージを調査することによって、日本語学習への動機づけの程度とその効果について吟味する。さらに、学習者すなわち受講生側のもつ要因として、性差と母国語をとりあげ、これらの要因による動機づけとの関連性をも合わせて検討する。

方 法

被験者 ニューカッスル大学日本語コース受講生130名。このうち、2回の調査両方に回答した者、112名を分析の対象にする。その内訳は、一年生76名、二年生21名、三年生15名である。ただし、分析によって有効被験者数が異なることもある。

質問紙の構成

(1) 日本語学習に対する意識：日本語学習に対する意識を調査するにあたって、①日本における外国語学習についての諸研究(広島大学, 1978; 羽島, 1980等)、②オーストラリアの日本語学習についての諸研究(疋田, 1985等)、③学習の動機づけの質問紙、等を参考にし、25項目からなる質問紙を構成した。英語への翻訳は、ニューカッスル大学日本語学科のスタッフの検閲のもとに行った(具体的な項目については、後掲のTable 1-2 参照のこと)。これらの項目について、賛成か反対を6点尺度で回答をもとめ、「非常に賛成、いくらか賛成、やや賛成、やや反対、いくらか反対、非常に反対」の順に6点から1点を与えた。

(2) 日本語のイメージ：SD法によるイメージについての諸研究(井上・小林, 1985等)を参考にし、50項目からなる質問紙を作成した。5件法によって回答を求め、1点から5点の得点を与えて得点化した。

* 本研究は昭和62年に在外研究としてオーストラリア国で実施したものである。調査の実施に御協力いただいた University of Newcastle の K. ONO 教授をはじめとする日本語学科のスタッフの方々、またこの在外研究の機会を下さった教育学部の諸先生方に感謝致します。

Table 1-1 ニューカッスル大学の学期および調査の実施時期

期 間	日 程
一学期 期間	2月23日～4月27日
試験	5月18日～5月22日
— 第1回目の調査実施	
二学期 期間	5月25日～8月14日
試験	8月17日～8月21日
— 第2回目の調査実施	
三学期 期間	9月7日～10月30日
試験	11月3日～11月7日
最終試験(全学一斉)	11月9日～11月27日

実施期間 1987年5月および9月。大学の学期、試験日程の都合に合わせて、2回の調査を実施した。第1回の調査は二学期の開始時、第2回目は二学期終了後である。Table 1-1に、ニューカッスル大学の学期と試験期間、本調査の実施時期を表記しておく。

分析方法 分析は、基本的には、(1)日本語学習に対する意識、(2)日本語のイメージ、について別々に行い、学年、男女、母国語、による比較を中心にする。学年による比較は、大学での開講科目のJapanese I, Japanese II, Japanese IIIと対応しており、順に困難度が増しているため、日本語の習得度の指標として扱うことができる。また、実際の各学年内での個々人の成績の資料も得られており、必要に応じて分析に加える。性差に関しては、とくに日本語へのイメージが異なることも考えられ、分析の対象にする。最後に、母国語についてであるが、ニューカッスル大学では、これまで南欧、西アジア、東南アジア、台湾、中国などからの留学生も受け入れている。その数もかなり多く、日本語の受講生をみると、その3分の1以上を占めている。かれらは、授業に関しては、オーストラリアの学生と全く同等に扱われているが、英語を母国語としないものが殆どである。日本語の学習という視点にたてば、彼らにとっては、日本語は、英語の学習に加えて習得しようとしている科目であり、第2外国語の学習である。したがって、本研究では、この要因についても、比較分析の対象とする。

結果と考察

(1) 日本語学習に対する意識について

1回目の日本語学習への意識について回答を求めた25項目について1～6点(反対～賛成)を与え得点化し、その得点をもとに、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、3因子を抽出した。結果はTable 1-2に示したとおりである。これをもとに、日本語学習に対

する意識を3つの次元(尺度)からみていくことにする。まず、①目標尺度:第1因子への負荷が高い8項目からなる。日本語の学習に対する目標が明確か否か、の次元である。この8項目の α 係数は、.79と高い。②有用性尺度:第2因子として抽出されたのは一般的な、日本語を学習することの有用性の程度に関する次元であり、これには6項目が含まれ、 α 係数は.77となっている。③必要性尺度:第三番目の因子は、日本語を学習することに対する自分自身の意識・必要性の程度に関する次元で、個々人にとっての日本語を学習する意義・意味についての項目群からなっている。ここに含まれる8項目の α 係数は、.73である。どの尺度においても得点が高いほど、日本語学習に対する意識が高くなるように、いくつかの項目を反転した。

以上の3尺度間の相関は、すべて有意で.26～.35の範囲である。1回目の調査と2回目の調査における、これらの尺度間の相関(因子ごとにI, II, IIIと記す)は、Table 1-3に示したように一様に有意な正の相関であるが、ただ、1回目の目標尺度と2回目の有用性尺度間の相関係数は高いものではない。

以下、この3つの尺度にそって、それぞれの視点から結果を示す。

1) 学年による日本語学習に対する意識の比較

日本語の授業の内容は学年によって異なっており、1年生では、日本語の基礎である、ひらがな・カタカナ・簡単な漢字・文法・助詞等の使い方を中心とした授業である。2年生になると、初歩的な日本語の文の読み書き、複文等の理解に重点がおかれている。3年生では、日本語による著作をテキストにした講読演習の授業となる。このように、学年が進むにつれて困難度が増しており、日本語習得の指標として学年を用いることができよう。

各学年の3つの尺度の得点の平均値をTable 1-4に

Table 1 - 2 日本語学習に対する意識・因子分析の結果

	項 目	I	II	III	h ²
I	• I want to have a good knowledge of Japanese.	.89	.06	-.04	.80
	• It would be very nice for me if I could speak Japanese fluently.	.78	.00	.03	.61
	• I want to learn Japanese and go to there.	.78	.18	-.08	.65
	• I want to read Japanese books without dictionaries.	.49	-.00	.10	.25
	• The occupations which need Japanese are increasing, so to learn it is useful.	.46	.10	-.00	.22
	• Japanese will be useful in one's adult world.	.36	.13	-.19	.18
	• I want to see the Japanese movies without subtitles.	.32	.31	-.11	.21
	* It looks somewhat conceited to speak Japanese.	-.34	.04	.24	.17
II	• People should learn Japanese to gain international understanding and friendship.	.17	.77	-.07	.62
	• To acquire an international way of thinking, people should learn Japanese as one of the foreign languages.	.21	.76	-.00	.63
	• Japan is very interesting country, therefore we learn Japanese to know it better.	.25	.50	-.00	.31
	• For the future, youth should master Japanese to take an active part in the world community.	.26	.50	-.31	.41
	• Japanese has a logical structure, so it is useful for mental training to learn it.	-.03	.45	-.14	.22
	• Now, most people should have some knowledge of Japanese to improve themselves.	.15	.44	-.19	.25
	* The other foreign languages may be used universally, so it is not necessary to learn Japanese.	-.04	-.05	.65	.43
III	* The Japanese is merely one of the subjects in a course, so it is not seriously important.	-.09	-.09	.59	.37
	* We can read the foreign books in translation, so it is not necessary to learn Japanese.	.04	-.02	.50	.25
	* It is not significant for me to speak Japanese so well.	-.38	-.15	.48	.40
	* Even if I study Japanese a little, I can not master it.	-.24	-.17	.46	.30
	* Think about the height of culture level in my country it is not necessary to learn Japanese.	-.05	-.09	.45	.21
	* It would be satisfactory if I could write a letter in Japanese.	.09	.03	.41	.18
	* We can do daily life without Japanese, only the person who needs Japanese should learn Japanese.	.01	-.01	.34	.12
	残余項目	I have no choice but to learn Japanese.	-.16	.26	.16
	It looks very smart to speak Japanese.	-.04	.25	.02	.06
	If I had some knowledge of Japanese, I have a sense of superiority over the person who can not speak it.	-.11	.18	.21	.09
級内平方和		3.30	2.45	2.31	

* 尺度構成の際に反転した項目

Table 1-3 日本語学習に対する態度・尺度間相関 一回数別

因子	I	II	III	I-2	II-2	III-2
I		.35**	.26**	.59**	.37**	.42**
II			.29**	.19	.55**	.25*
III				.29**	.28**	.54**
I-2					.57**	.56**
II-2						.55**

因子の後の数字は2回目を示す * p<.05 ** p<.01

Table 1-4 日本語学習に対する意識 一学年比較 ()内SD

回	学年・尺度	目標尺度〔28〕	有用性尺度〔21〕	必要性尺度〔28〕
1 回 目	1年 (n = 72)	37.33 (5.62)	23.96 (5.32)	30.85 (6.50)
	2年 (n = 21)	43.14 (2.95)	28.24 (4.74)	32.00 (4.81)
	3年 (n = 15)	40.27 (5.11)	22.80 (6.88)	32.53 (9.06)
	全体 (n = 108)	38.87 (5.61)	24.62 (5.69)	31.28 (6.66)
	F 値	11.01**	6.01**	ns
2 回 目	1年	38.17 (5.72)	24.49 (4.57)	30.73 (6.40)
	2年	42.44 (3.48)	27.00 (4.40)	33.13 (5.42)
	3年	39.60 (10.14)	24.87 (6.84)	32.00 (9.25)
	全体	39.29 (6.33)	25.05 (4.96)	31.42 (6.68)
	F 値	3.86*	ns	ns

各尺度の midpoint を [] で記す * p<.05 ** p<.01

Table 1-5 日本語学習に対する意識 一男女別比較

回	性・尺度	目標尺度	有用性尺度	必要性尺度
1 回 目	男 (n = 48)	36.79 (5.70)	24.44 (6.09)	30.77 (7.52)
	女 (n = 60)	40.53 (4.98)	24.76 (5.41)	31.70 (5.89)
	F 値	13.24**	ns	ns
2 回 目	男	36.50 (7.54)	23.36 (5.89)	29.33 (7.75)
	女	41.24 (4.43)	26.23 (3.79)	32.91 (5.40)
	F 値	14.62**	9.63**	7.98**

** p<.01

示す。いずれの尺度、どの学年においても各尺度得点の平均値は midpoint より高く、日本語の学習に対する意識は高いといえる。中でも、2年生の平均値が高く、1回目の調査において、目標尺度では1年生よりも有意に高くなっている。また有用性尺度においても、2年生は1年生、3年生よりも有意に高い得点を得ている。さらに、2回目の調査でも、目標尺度では2年生は1年生よりも

高くなっている。ただ、各学年の1回目から2回目への変化については、いずれの学年においても有意な差は得られなかった。以上のように、総じて、2年生の学習に対する意識が高いといえる。

2) 日本語学習に対する意識の性別比較

日本語の受講生における男女の割合は、女性の方が多。男女別得点の平均値を示したTable 1-5による

Table 1-6 日本語学習に対する意識 —母国語別比較—

回	母国・尺度		目標尺度		有用性尺度		必要性尺度	
1 回 目	英 語 (n=70)		40.24 (5.47)		25.75 (5.43)		33.03 (6.05)	
	非英語 (n=36)		35.97 (4.84)		22.58 (5.73)		28.03 (6.65)	
	F 値		15.38**		8.11**		14.74**	
2 回 目	英 語		40.90 (5.01)		25.81 (4.45)		33.13 (5.91)	
	非 英 語		35.64 (7.54)		23.34 (5.56)		27.66 (6.81)	
	F 値		14.95**		6.10*		18.14**	

() 内SD

* p<.05, ** p<.01

と、1回目の調査では、目標尺度においてのみ、性による有意な差がみられ、女性の方が高得点となっている。2回目になると、すべての尺度において女性の平均値が高くなっている。ただ、1回目と2回目の結果の比較では差が認められなかったことから、日本語学習に対する意識のひらきは相対的なものであるといえよう。

3) 日本語学習に対する意識の母国語による比較

英語を母国語とする学生が日本語を受講する場合と非英語圏の学生の場合とでは、当然その意識にも相違がみられることが予想される。非英語圏の学生にとっては、英語に次ぐ第2外国語として日本語を選択している場合が多いこと、また、中国、台湾からの学生にとってはその歴史的な背景から、さらに、漢字の使用という点から日本語を身近に感じていることも、日本語学習に対する意識に影響してくるであろう。

Table 1-6 に示した結果から、1回目、2回目の調査ともに、英語圏の学生の方が非英語圏の学生よりも、日本語学習に対する意識が高くなっている。さらに、非英語圏学生の必要性尺度の平均得点は中点に近く、日本語の学習が自らにとって必要であるとする意識はあまり高くない。1回目と2回目の差は、両群ともにみられなかった。このように、日本語よりも英語の学習をまず必要としている学生においては、日本語学習の意識は、相対的に低くなっているといえる。

(2) 日本語のイメージについて

日本語に対するイメージをSD法を用いて調査した1回目の結果を、各項目1点から5点として得点化し、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。Table 2-1 に、その結果を示す。抽出された因子は5因子である。これらの因子は次のように解釈できる。①第I因子・情緒性の次元：快-不快、陽気な-憂うつな、積極的な-消極的な、といった項目に代表される次元で、日本語に対する情緒的なイメージを示している。

これらの12項目間の α 係数は、.82である。②第II因子・力量性の次元：小さい-大きい、軽い-重い、柔らかい-固い、に代表される項目群で、力強さについてのイメージである。計9項目からなり、その α 係数は.78となっている。③第III因子・活動性の次元：強い-弱い、動的な-静的な、活発な-不活発な、などの11項目からなり、日本語の活動性を示す項目群である。 α 係数は.76である。④第IV因子・評価性(情緒)の次元：日本語の評価に関する次元であるが、とくに情緒的な側面をあらわす項目からなっている。具体的には、長い-短い、豪華な-平坦な、男性的な-女性的な、といった項目が含まれる。この7項目の α 係数は.63となっている。⑤第V因子・評価性(力量)の次元：第4因子と同様に、評価的次元であるが、単純な-複雑な、簡単な-困難な、自由な-不自由な、といった力量性に関する計8項目からなっている。 α 係数は、.65である。

これらの因子(次元)間の相関は、Table 2-2 のようである。この表は、次元間の相関が正の相関をもつように、さらに得点が高いほどプラスのイメージとなるように各次元の得点を反転してある。また、この表には先の日本語の学習に対する意識についての3尺度との相関係数も示してある。第I因子の情緒性次元はいずれの次元とも相関が高いことがわかる。また、第IV因子の評価性(力量)の次元も、第IV因子の評価性(情緒)次元をのぞいた他の次元との相関は高い。日本語に対する意識の3尺度との相関は、第I因子、第III因子においてすべての尺度と有意な正の相関がみられる。また、第II因子も目標尺度と有用性尺度との間に低い正の相関がある。したがって、日本語のイメージと日本語に対する意識とは、評価的側面以外の情緒、力量、活動にかかわるイメージにおいて関連性が強いといえよう。

1) 日本語のイメージの学年間比較

Table 2-3 は学年毎の各次元の得点を示したものである。このイメージ得点が高いほど日本語に対するポジ

日本語学習に対する意識と日本語のイメージ

Table 2 - 1 日本語のイメージ・因子分析の結果

			I	II	III	IV	V	h ²
I	unpleasant	— pleasant	.74	-.12	-.01	-.09	-.17	.60
	gloomy	— cheerful	.66	-.15	.05	-.13	-.10	.49
	negative	— positive	.64	.01	-.10	.08	-.14	.45
	boring	— delightful	.63	-.04	-.07	.00	.03	.40
	sorry	— happy	.59	-.02	.03	-.16	-.12	.49
	dull	— sharp	.51	.06	-.47	-.06	.02	.49
	poor	— fine	.48	-.26	-.20	-.27	-.02	.41
	painful	— pleasurable	.46	-.28	-.10	-.26	-.15	.40
	wrong	— right	.42	.06	.01	.05	.07	.19
	dirty	— clean	.33	-.26	-.03	.07	.28	.26
	* gay	— lonely	-.38	.15	.20	-.05	.04	.21
	* good	— bad	-.44	.25	.08	.17	.10	.30
II	* small	— large	.00	.70	-.00	-.39	.01	.64
	* light	— heavy	.03	.66	.12	-.26	.01	.52
	* quiet	— noisy	-.16	.64	-.10	.11	-.06	.46
	* soft	— hard	-.25	.62	-.14	.07	.11	.48
	* smooth	— rough	-.34	.52	.10	.23	.18	.48
	* beautiful	— ugly	-.18	.44	.22	.29	-.09	.37
	* pure	— impure	-.17	.42	.27	.23	-.04	.34
	* white	— black	.05	.41	.12	.14	.19	.24
	* grateful	— ungrateful	-.12	.36	.30	.12	.23	.30
III	* dynamic	— static	-.22	.15	.55	.06	.18	.41
	* active	— inactive	-.04	.05	.55	-.04	.19	.35
	* rare	— ordinary	.03	.12	.52	.21	-.09	.34
	* bright	— dark	-.19	.29	.49	.14	.34	.50
	* strict	— tender	.07	.00	.47	-.13	-.20	.28
	* rational	— sentimental	.04	.01	.46	-.43	-.00	.39
	* complete	— incomplete	-.20	.37	.38	.14	.24	.39
	* deep	— shallow	-.09	.20	.36	.32	-.19	.31
	* quick	— slow	-.14	.14	.33	-.00	.24	.21
	* reliable	— unreliable	-.27	.30	.33	.09	.32	.38
	weak	— strong	.09	.24	-.59	.01	.12	.43
IV	* long	— short	.19	-.07	-.11	.57	.08	.38
	* luxurious	— plain	-.09	.06	.10	.55	-.06	.32
	* passionate	— mild	-.18	.02	.11	.48	.20	.32
	masculine	— feminine	.02	-.22	.19	-.33	.12	.21
	inferior	— superior	.11	-.12	-.26	-.34	-.04	.21
	disliking	— liking	.36	-.14	-.21	-.39	.02	.35
narrow	— wide	.16	.36	.14	-.45	-.06	.39	
V	* simple	— complicated	-.16	-.11	-.07	-.03	.57	.38
	* near	— far	-.01	.23	-.01	-.17	.42	.26
	* free	— constrained	.01	.03	-.04	.13	.40	.18
	* convenient	— inconvenient	-.14	.26	.31	.39	.39	.49
	* hot	— cold	-.00	-.02	.07	-.11	.38	.16
	* consistent	— inconsistent	-.23	.12	.13	.20	.33	.23
	square	— round	-.02	-.06	-.18	-.13	-.30	.14
	difficult	— easy	.25	-.08	.18	.02	-.46	.32
残余	vague	— clear	.29	-.09	-.14	-.15	-.20	.17
	new	— old	-.13	.21	.10	.09	.11	.09
級内平方和			4.51	3.89	3.43	2.83	2.34	17.00

* 反転項目

(注：50項目中1項目は回答上の不備があり分析からはずした)

Table 2-2 日本語のイメージの次元間相関および意識尺度との相関

次元・尺度	I	II	III	IV	V
I		.41**	.38**	.26**	.25**
II			.42**	.11	.28**
III				.09	.28**
IV					.15
目標尺度	.29**	.29**	.27**	.13	.07
有用性尺度	.33**	.22*	.30**	.04	.15
必要性尺度	.28**	.08	.21*	.10	.19

* p < .05, ** p < .01

Table 2-3 日本語のイメージ次元の学年比較 () 内SD

学年・次元		情緒性(36点)	力量性(27点)	活動性(33点)	評価性情緒(21点)	評価性力量(24点)
1 回 目	1年 (n=74)	43.68 (6.46)	28.56 (5.79)	41.23 (6.20)	22.20 (4.02)	21.65 (4.54)
	2年 (n=21)	46.75 (5.30)	32.95 (4.32)	42.60 (4.60)	21.85 (3.22)	21.14 (3.85)
	3年 (n=15)	44.36 (7.53)	30.29 (8.08)	39.00 (8.25)	24.73 (4.56)	22.47 (5.41)
	全体 (n=108)	44.33 (6.50)	29.66 (6.08)	41.18 (6.29)	22.49 (4.03)	21.67 (4.52)
	F 値	ns	4.60**	ns	2.86*	ns
2 回 目	1年	43.81 (5.84)	28.49 (5.10)	41.06 (5.08)	22.68 (3.53)	22.52 (4.40)
	2年	46.22 (6.95)	32.05 (5.26)	42.48 (5.28)	22.86 (3.11)	22.52 (4.57)
	3年	41.80 (7.66)	30.07 (4.80)	39.80 (3.80)	23.20 (3.34)	21.47 (3.74)
	全体	44.05 (6.43)	29.45 (5.25)	41.19 (4.99)	22.79 (3.40)	22.37 (4.33)
	F 値	ns	4.18*	ns	ns	ns

各次元の合成得点の midpoint を [] で記す。 * p < .05, ** p < .01

Table 2-4 日本語のイメージ次元の男女別比較 () 内SD

学年・次元		情緒性	力量性	活動性	評価性(情緒)	評価性(力量)
1 回 目	男 (n=48)	44.24 (6.52)	28.44 (5.90)	41.12 (6.86)	21.90 (3.99)	22.57 (4.62)
	女 (n=60)	44.41 (6.53)	30.67 (6.09)	41.12 (5.83)	22.97 (4.04)	20.92 (4.32)
	F 値	ns	3.64 p < .06	ns	ns	3.69 p < .06
2 回 目	男	43.16 (6.37)	28.77 (5.23)	41.02 (5.01)	22.05 (3.33)	22.61 (3.82)
	女	44.68 (6.46)	29.94 (5.25)	41.30 (5.02)	23.33 (3.37)	22.21 (4.67)
	F 値	ns	ns	ns	3.74 p < .06	ns

典型的なイメージを表している。1回目の調査において学年間の有意差が認められたのは、力量性の次元と評価性(情緒)次元である。力量性の次元では、2年生の得点が1年生よりも高くなっており、評価性(情緒)次元では、逆に2年生の得点が1年生、3年生よりも低い。このイメージを平均値を用いて図示したのが、Fig. 2

-1である。2年生では、日本語のイメージは、一般的に良いが、1年生でやや下がっている。学年をとおしてみると、情緒性、活動性については、よいイメージであるが、力量性、評価性(情緒)、評価性(力量性)については、中庸のイメージとなっている。2回目の調査においても同様な傾向がみられ、学年内の変動には有意な

日本語学習に対する意識と日本語のイメージ

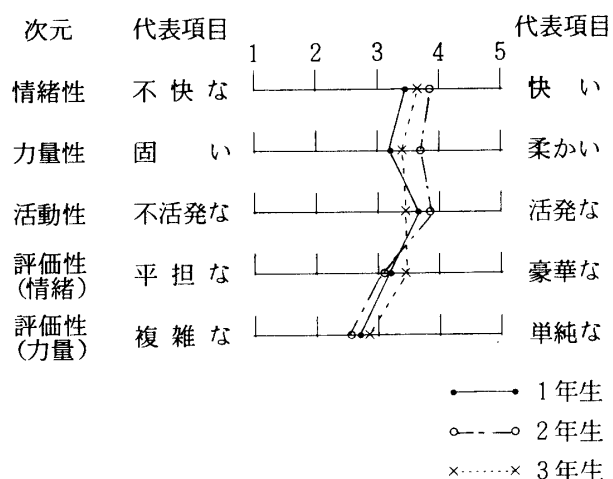


Fig 2-1 学年別日本語のイメージ

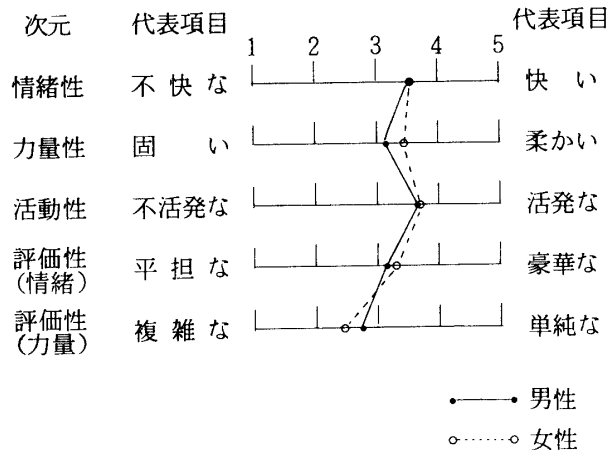


Fig 2-2 男女別日本語のイメージ

Table 2-5 日本語のイメージ次元の母国語別比較

母国語・次元		情緒性	力量性	活動性	評価性(情緒)	評価性(力量)
1 回 目	英語 (n=70)	45.09 (7.05)	30.17 (6.26)	42.24 (6.26)	22.00 (3.90)	21.64 (4.65)
	非英語 (n=36)	43.13 (5.21)	28.72 (5.78)	39.16 (6.01)	23.47 (4.16)	21.78 (4.35)
	F 値	ns	ns	6.02*	3.36 p < .07	ns
2 回 目	英語	44.65 (6.91)	29.18 (5.42)	42.32 (4.93)	22.62 (3.21)	21.89 (4.59)
	非英語	42.79 (5.39)	29.88 (4.98)	38.88 (4.46)	23.06 (3.87)	23.38 (3.64)
	F 値	ns	ns	11.91**	ns	ns

* p < .05, ** p < .01

変化はみられなかった。全般的に、2年生では、第V因子の評価性(力量)を除いて、日本語のイメージは他の学年に比べて、相対的に良くなっている。また、3年生では、評価性(情緒)の次元のイメージが他の学年に比べて、やや高いといえる。

2) 日本語のイメージの男女比較

男女別にみた各次元のイメージ得点の平均値をTable 2-4に示した。さらに、それらを図示したものがFig. 2-2である。日本語に対するイメージには、男女の差はほとんどない。また、1回目、2回目の変化もみられない。

したがって、日本語のイメージに関しては、男女による相違は認められないといえる。

3) 日本語のイメージの母国語の違いによる比較

日本語の学習に際して、その習得が第1外国語としてか第2外国語か、によるイメージの相違をみる。Table 2-5は、各次元のイメージ得点の平均値を示したものであり、Fig. 2-3にそれを図示した。この図から、母国語が英語圏の者のほうが、評価性(力量)の次元を除いて、日本語に対するイメージが全般的に良いよう

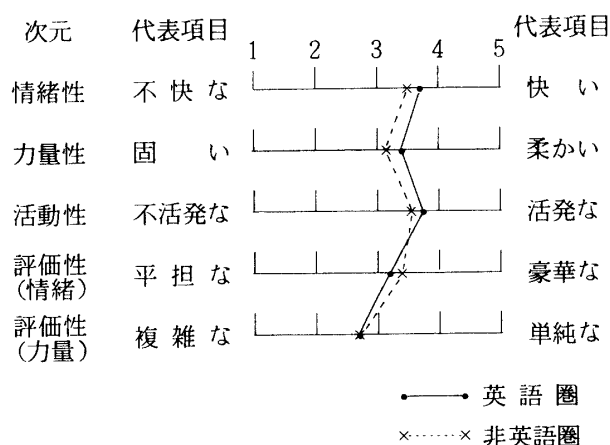


Fig 2-3 母国語別日本語のイメージ

ある。しかし、非英語圏のものとは有意な差があったのは、第III因子の活動性の次元のみで、他の次元では有意な差ではなかった。また、1回目と2回目でも差は認められない。

このことから、英語が母国語であるか否かによって、日本語のイメージが顕著に異なるとはいえないだろう。

全体的考察およびまとめ

本研究は、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州、ニューカッスル大学における日本語コースの受講生を対象に、学期始めと学期終了時の2回にわたって、日本語学習に対する意識と日本語に対してもっているイメージについて調査したものである。その際に、学習進度の一つの測度として、学年をとりあげて分析した。これは、日本語の授業内容が成績と対応しており、学年が上になるほど日本語の習得の程度が高くなっていることによる。さらに、学習者すなわち受講生側のもつ要因として、性差と母国語の違いをとりあげ、これらの要因と日本語に対する意識、日本語のイメージとの関連性も分析した。ここでは、これらの調査結果をまとめながら、考察を進めていく。

まず、日本語学習に対する意識に関する分析から、目標、有用性、必要性の3尺度を構成した。これらの尺度間には、かなり高い関連性がみられた。どの学年においても、学習に対する意識は高く、学期始め、終了時ともに、動機づけは高いといえる。なかでも、2年生の意識が高く、学習の目標がかなり明確で、日本語学習が社会的に有用であり、将来性のある言語であるという認識が強いようである。3年生も1年生と比較すると意識は高いが、有用性尺度においてのみ2年生よりも意識が有意に低かった。これには、いくつかの理由が考えられるが、一つには、3年生になると、かなり高度な学習になるために、現実の言語使用という実用性の面での困難さゆえに、意識が低められたとも考えられる。これは、動機づけの視点からすると、学習課題の困難度と動機づけの高さの問題として捉えることができよう。

性差に関しては、女性の方が男性に比べて、学期始め、終了時ともに学習に対する意識は高く、動機づけが持続する傾向がある。

母国語の相違については、予想どおり、英語圏の学生の方が、英語を母国語としない学生よりも学習意識は高く、一般的に日本語学習に対する動機づけは高いといえる。英語を母国語としない学生、とくに中国系の学生においては、親しみのある漢字を武器として教養科目の単位の取得を目指す者も多くみられ、さらに、彼らにとっては英語の学習がまず必要なわけで、当然日本語の学習に対する動機づけも相対的に低くなってくるといえる。

以上のように、日本語学習に対する意識・動機づけに関しては、現在の日本語の習得度に応じて高くなっているが、有用性に対する意識は、中程度の習得段階で、もっとも高くなることが示唆される。さらに、言語学習の動機づけの高さは、女性のほうが優っていること、言

語学習の中での優先順位、すなわち、学習者にとっての外国語学習の位置づけによって、動機づけの高さが異なるといえる。

次に、日本語に対するイメージであるが、イメージの次元として、情緒性、力量性、活動性、評価性（情緒）、評価性（力量）の5つが得られた。全般的に、日本語のイメージは良いものであったが、評価性（力量）の次元においてのみ、マイナスのイメージであった。学年別にみると、力量性、情緒性次元での2年生のもつイメージが相対的に良いようである。この学年の学習に対する意識・動機づけが高いことを考えあわせると、予想される結果であった。

ここで、各次元から得られるイメージについてみると、情緒性は、いわば快-不快の次元であり、楽しい明るいイメージとなっている。力量性の次元は、小さい、軽い、静か、柔らかい、美しいなど、イメージとしては柔和で優雅な感じである。活動性の次元は、動的で活発なイメージである。評価性（情緒）では、長い、豪華、広いなどの側面を反映している。しかし、評価性（力量）のイメージは、単純、容易、近いといった項目からなっており、それらに対応する語である複雑、困難、遠い、といったイメージとの間にプラス・マイナスの区別をつけにくい次元であった。この次元には、もっと適切な命名があるとも考えられるが、本研究であえて評価性（力量）としたのは、先の力量性の次元での項目群との相関、さらにイメージの近さという点を考慮したからである。しかし、この次元においては、日本語はやや複雑、困難なものであるというイメージがあるようである。

最後に、日本語学習に対する意識と日本語のイメージとの関連性について、本研究では、これを直接的に対応づけて扱っていない。しかし、意識尺度とイメージ次元の相関についての結果から、とくに、日本語の情緒性、力量性、活動性のイメージと意識尺度間の相関が高いことが指摘されている。すなわち、日本語に対して、快い感じ、優雅で柔和な感じを抱き、動的で活発であるというイメージをもつことと、日本語学習に対する意識の高さとは相互に関連しているといえよう。ただ、困難さ、近さ、また長さ、広さといった評価に関わるイメージと、意識の高さとはあまり関連はないようである。

文 献

- 羽島博愛 1980 外国語の学習 児童心理学の進歩
117-140.

- 疋田正博 1985 オーストラリアにおける日本語教育 日本語教育および日本語普及活動の現状と課題 総合研究機構, 625-643. 研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- 広島大学教育学部英語教育研究室 1978 高校生の英語学習意識 語研英語教育年鑑, 188-237. 大野喜代治 1982 ニューカッスル大学の日本語教育 日本語教育, 48, 113-120. (1988年7月31日 受稿)
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による

ABSTRACT

Motivation to Learn and Image of the Japanese Language in Australian Students

Setsuko ISHIDA

The purpose of this study was to investigate how Australian students were motivated to learn the Japanese language and what image they have about Japanese. The subjects were undergraduate students enrolled in a Japanese course at the University of Newcastle, New South Wales, Australia.

Three scales of learning motivation were obtained by factor analysis; having an objective, perceiving usefulness, and feeling necessity.

As a result, motivation to learn Japanese was found to correlate with grade, sex, and native tongue. On the whole, second grade students scored highest. Female students were more motivated to learn than male, and native speakers of English were more motivated than speakers of other languages.

The image of the Japanese language was measured by using the Semantic Differential Method. Dimensions obtained were as follows: emotion, potency, activity, evaluation (emotion), and evaluation (potency). In general, students' image of the Japanese language can be described with such adjectives as "pleasant", "cheerful", "active", "dynamic", "strong", "complicated", and "difficult".